

聖霊降臨節第17主日礼拝 説教 「正々堂々と」 要旨

日本キリスト教団藤沢教会 2020年9月20日

エレミヤ書 50章4～7節 ヨハネによる福音書 10章1～6節

おはようございます。過ぐる一週間も主の恵みの中に過ごすことを許された私たちであります。ところで、私たちは今どうしてここにいるのでしょうか。それは、先週いただいた恵みに飽き足らなかったからではなく、また、神様の恵みという、私たちに与えられた既得権を手放したくなかったからでもありません。それは、神様が私たちに求められていることであり、つまり、安息日を守るようにとの神様の戒めを私たちが後生大事にしているからこそ、こうして主の日の度ごとに私たちは礼拝に集うているということです。ちなみに、後生大事という言葉は元々は「後生一大事」と言われていた仏教用語で、その本来の意味は「来世の安楽を願ってひたすら善行を積んで仏道に励むこと」ということです。ですから、私たちにとっての主の日の礼拝は、まさに「後生一大事」ということなのかもしれませんが、ただ、それは、来世の平安を願い、善行を積み重ねることではありません。私たちの信仰生活は修行ではなく、主と共にある私たちの日常であり、そして、それが私たちに備えられているのは、この7日の旅路の繰り返しこそが、主我らと共にいます現実でもあるからです。ただし、それは、何の苦勞もなしに、ということではありません。7日の旅路は、時に荒海を漂うようなものであり、それゆえ、私たちは、自分自身を見失いそうにもなるのです。ですから、7日の旅路を終え、主の御前にこうして集まることで、私たちは、この世の荒波の中で見失いかけている自分自身を取り戻すことができるのです。このように、主の日の礼拝は、私たちが心新たに一週間を歩み始めるために必要なものであり、それゆえ、主の日の礼拝は、私たちクリスチャンにとっては欠かすことのできないもの、それこそ、後生一大事なことだということです。

そして、その私たちに向かって、御言葉は今日も何かを語ろうとしているのですが、それは、私たちが後生一大事に礼拝を守り、献げる理由です。エレミヤ書には「我が民は迷える羊の群れ」、「自分の“行こう”とする場所を忘れた」、「彼らが、まことの牧場である主に、先祖の希望であった主に罪を犯したからである」とありますが、それは、神の民イスラエルが主なる神様に背き、離れていた過去があるからです。そして、そう御言葉が私たちに語りかけるのは、ともすれば、私たちもそうなりかねないから、いや、現にそういう者だからです。ですから、聖書の御言葉にあることは、遠い昔のことではありません。今までもずっとそうだったし、今もそうですし、これからもそうなのです。それは、迷い、忘れ、罪を犯し続けることでしか生き得ないのが、神様を信じる私たちであるからです。また、そうであるからこそ、私たちは、共に歩む主へと立ち帰り、自らを振り返り、心新たに歩み始める必要があるのです。ですから、過ぐる一週間の恵みは、心新たにしたがゆえに、主が私たちに賜ったものだとも言えるのですが、ただし、恵みをいただいたのは、主の御前にあって私たちが、神様の言いつけを守る、いわゆる、いい子であったからではありません。

心新たに過ごした私たちにとって、この一週間がどのようなものであったのか、恐らくは、多くの人々にとってそれは、主の御名を辱めるものではなかったことと思います。そうでなければ、あれだけ気持ちよさそうに讃美歌を歌うことはないからです。ちなみに、私たち藤沢教会は、本当に嬉しそうに、楽しそうに讃美歌を歌う方が多いと思います。それはさながら、おいしいものを口いっぱい頬張り、満面の笑みを湛える幼子のように

す。ですから、こうして正面から皆さんの姿を拝見し、正直、私の話など必要ないと思うことも度々です。それはまさに、エレミヤ書で「彼らはシオンへの道を尋ね、顔をそちらに向けて言う。『さあ、行こう』と。彼らは主に結びつき、永遠の契約が忘れられることはない」と語られていることと重なります。迷い、忘れ、過ちを犯すことの多い私たちでありながらも、私たちと結ばれた主なる神様との永遠の契約は、決して反故にされることがないと思えるからです。ですから、「主に結びつき」と御言葉が語るように、私たちと神様との関係性は、何があっても、どんな時にも、永遠に続いていくものであるのは間違いありません。皆さんの顔を見て、しみじみそう思えるからです。そして、それが、イエス・キリストの十字架と復活の出来事の中身であり、つまりは、そのニコニコ顔が示すところは、イエス様の十字架と復活の出来事が、つまりは、神様の約束が、そのような形で永遠に続けていることを物語ってくれているということです。それゆえ、御言葉は、この、永遠に続いていく神様との関係性に生きる私たちのことを「永遠の命に生きている」と言うのです。

そして、それが、今日、イエス様がここで私たちに仰っていることであり、ですから、イエス様がここで語る羊飼いと羊のたとえ話は、過ぐる一週間の私たち、礼拝を守り、献げる私たち、礼拝よりこの世の馳せ場へと送り出される私たち、つまりは、7日の旅路を歩む私たちの姿そのものを現しているということです。それゆえ、このたとえ話は、私たちにとっては、よく分からない話ではなく、よく分かる話です。なぜなら、そこに記されていることは、私たちの日常的光景であるからです。ただし、私たちがそこで見ているものは、気持ちよく過ごす自分自身の姿だけではありません。今日の箇所その直後で、イエス様が「はっきり言うておく。私は羊の門である」、また、「私が来たのは、羊が命を受けるため、しかも豊かに受けるためである。私は良

い羊飼いである。良い羊飼いは羊のために命を捨てる」と、こう仰っているように、私たちの命の要がイエス様であり、そのイエス様の庇護の下に置かれているのが私たちであるわけですから、その日常的光景の中で私たちが見ているものは、自分自身の姿だけではありません。私たちの命を守り支えておられるイエス様のことも一緒に見ているということです。

従って、それは、一緒に、ということなわけですから、いつでもどこでも、ということです。つまり、食卓においても、会社や学校においても、それこそ、お風呂の中でも、トイレの中でも、私たちがいるところにはどこでもイエス様の姿があるということです。それも、流行歌のフレーズにあるような、安っぽい関係性の中でのことではありません。イエス様の声の届く範囲に私たちはいるということであり、そして、このことは、私たち大人から子どもまで、教会と関わるすべての人たちが理解し、また了解していることでもあるのでしょ。なぜなら、それが私たちの生活感覚、生活実感であり、この感覚によって作り上げられているものが私たちの信仰生活でもあるからです。

そして、この感覚は、イエス様が独自に生み出したものではありません。ヨハネによる福音書で繰り返し語られている言葉として、「はっきり言うておく」とのイエス様の言葉がありますが、それは、直訳すれば、「アーメン。アーメン。私は言う」ということです。そして、この言葉が繰り返し語られているということはつまり、イエス様は、それを誰かに聞かせようとされているということです。もちろん、それは私たちに対して、ということでもあります。もうお一人、このイエス様の言葉を聞いているお方がいるのです。それがイエス様の父なる神様であります。このことはつまり、このテンポよくリズムカルに語られている「アーメン、アーメン、私は言う」という言葉を私たちが繰り返し聞いていく中で、イエス様が父なる神様のもとで身につけた生活感覚を私たちもまた同じよう

に身につけることになるということです。ですから、私たちの生活感覚は、神様譲り、イエス様譲りのものだと言えるのですが、このことはつまり、私たちがイエス様と同じように、「天のお父様」と、心を込めて、思いを込めて祈ることができるのはそれゆえのことであるということです。従って、ここでのイエス様のたとえ話は、神様とイエス様に支えられ、導かれている、そういう私たちの生活実態を現していると言えるのでしょう。ですから、このたとえ話は私たちにはよく分からない話ではなく、よく分かる話であるということです。

ところが、私たち以上に神様への気持ちが強く、また、聖書に記されている様々なことについても、私たち以上によく知っているファリサイ派の人たちには、このイエス様のたとえ話はさっぱり分からないものであったということです。ただ、このことはまた、七日の旅毎にこうして御言葉に聞いている私たちにとっては、さもありませんということでもあります。それにしても、どうして彼らには私たちの分かることが分からなかったのでしょうか。それは、神様が約束してくださった「永遠の契約」を誤解し、自分たちの既得権のように考えていたからです。つまり、すべてを知り、すべてを分かっているのは自分たちだけであると、彼らがそう思っていたということです。それゆえ、彼らは、自分の知っていること、分かっているところから、人が外れることが許せなかったわけです。いや、そもそものところで、自分たち以外の者が信仰について何かを語ることなどできるはずもない、そう信じ、そう思っていたのがファリサイ派の人々であったということです。つまり、信仰ゆえの頑なさ、偏りが、彼らをしてそのようにさせたということです。まただから、イエス様はそんな彼らに向かって、たとえ話を語ることで、少々キツイ言い方ではありましたが、気づきを与えようとされたのです。ちなみに、イエス様がたとえ話を語るのは、難しい話を優しく語るためではありません。

その意図するところは、語るその相手の頑なさ、思い込みを打ち砕くところであり、つまりは、そこにイエス様の愛が現れているということです。

ですから、そういう意味で、私たちがイエス様を信じるということは、そのような思い込み、頑なさが打ち砕かれたということであり、まただから、先ほど申しましたように、皆さんの讚美歌を歌う姿は、硬く、とげとげしいものではなく、本当にうれしそう、楽しそうなものであると言えるのです。けれども、そこでもし歌うことに横槍を入れられたらどうでしょうか。また、それだけではなく、私たちには、歌いたい気分の時があれば、歌いたくない気分の時もあります。もし、歌いたくないと思う時、起立して声を出して、それも、好きな讚美歌ならまだしも、好きでもない讚美歌を歌えと言われてたらどうでしょうか。勘弁して欲しいと内心ではそう思うことでしょうか。ましてや、強いられるようなことがあれば、いい加減にしてくれと、叫びたくもなるのでしょうか。しかし、そのときの私たちの姿はどういうものなのでしょうか。イエス様に対して頑なな態度を示すファリサイ派の人々と何が違うと言えるのでしょうか。しかし、そうした自我、エゴと言われているものを完全に捨て去ることのできる人が果たしてどれほどいると言えるのでしょうか。

私たちは、迷い、忘れ、自分が何ものなのかも分からなくなることがあります。そのようなとき、私たちは何かにしがみつこうとするのですが、そのためには握っていたものを手放さなければなりません。けれども、自分が大切にしてきたものを易々と手放せる者はいません。それが、イエス様の前に立つファリサイ派の人々だと思っただけですが、では、私たちとファリサイ派の人々とは、本質的には何が違うのでしょうか。今日のエレミヤ書の御言葉が前半と後半を見て行くと、そこではまったく正反対のことが語られています。しかし、それが同じ一つの神の民の姿なのであり、つまりは、神様に

対して素直な自分も、神様に対して頑な自分も、同じ一個の自分でしかないということです。ですから、素直な自分と頑なな自分を分けて考え、頑なな部分にファリサイ派というレッテルをいくら貼ったところで、それで何かの説明がつくわけではありません。ところが、そこに説明がつくし、説明がつく以上、説明通りにならなければいけないと思っていたのがファリサイ派の人々でもありました。ただ、彼らがそうするところは、私たちにも分からないことではなく、よく分かることです。それは、説明のつかないことは気持ちが悪いし、それをそのままにしておくことは、もっと気分の悪いことでもあるからです。

ですから、最悪の気分を抱えたままでこの譬え話を聞いていくなら、私たちは自分が何者なのかすら説明がつかなくなってしまうこともあるのでしょうか。けれども、そこで私たちに求められていることは、何かの説明をすることではありません。イエス様の声のする方に振り返ることで、その声の主の言っていることに聞くことなのではないでしょうか。まただから、そこで私たちは知るのです。頑なな自分も素直な自分も、イエス様にとっては、それぞれが同じように大切な羊であり、その私たちが、羊飼いであるイエス様によって養われ、支えられ、導かれていると、イエス様の手の中であって、私たちは、自分が何者なのかを知らされることになるのです。ですから、自分のしていることに説明がつけられることは大事なことではありますが、説明のつかないことを無理に説明しようとするのは土台無理な話でもあるわけです。そして、そういうことは、人生においては度々あることであり、それだけにまた、私たちは、説明のつかないことをできるだけ少なくしようとするのでしょうか。しかし、説明がつけば、それで私たちは気持ちよくなるのでしょうか。むしろ、その逆のことが多いのではないのでしょうか。説明がつけばつくほど、空しさを募らせることがあるからです。しかし、私たち

の人生の意味は、説明のつくところではなく、説明のつかないところに置かれているのではないのでしょうか。

「主は羊飼い、私には何も欠けることがない」と語られている詩篇 23 編は、私たちがよく知るところの御言葉であります。それは、葬儀の度に繰り返し聞いてきたこの御言葉を通し、私たちが繰り返し主の慰めに与るものであるからです。そして、私たちがそこで主の慰めに与るのは、説明が尽くされ、納得がいったからではありません。依然として説明のつかないものが残され、それにも関わらず、主の慰めに与ることが許されているのが私たちなのです。それは、イエス様という門の内側に私たちがいるからであり、羊飼いであるイエス様によって導かれているのが私たちであるからです。ですから、そこにそれ以上の説明は必要ありません。喜ぶ私たちも、悲しむ私たちも、さらには、素直な私たちも、頑なな私たちも、理屈抜きに丸が抱えしてくださっているのが私たちの主、イエス様であるからです。しかし、それは、私たち人間の感覚からすれば、まったく説明のつかないことでもあるのでしょうか。けれども、私たちの生活感覚とその生活実態は、イエス様という門の内側で身につくものであり、それゆえ、私たちの生活は、その内側で繰り返されることにもなるのです。それゆえ、そこでは説明のつくこともあれば、つかないこともあります。嬉しいこともあれば、嬉しくないこともあるのです。けれども、人の日常生活とはそういうものであり、そして、イエス様にあっては、そのそれぞれが意味のあるものとされているのです。ですから、むしろ、その時に説明のつかないものほど、後々、イエス様の御手の中であってそれを振り返るなら、私たちはそこに大きな意味を見出すことにもなるのです。それゆえ、説明のつかないことを無理に説明しようとする必要はありません。私たちは主のものであり、その主が私たちと共にいてくださっているからです。祈りましょう。